

仇 跋

金毘羅神靈記

七

~ 13
3324
71



へ13
3321
7

繪本金毘羅神靈記卷七目錄

八木家本歴の詠

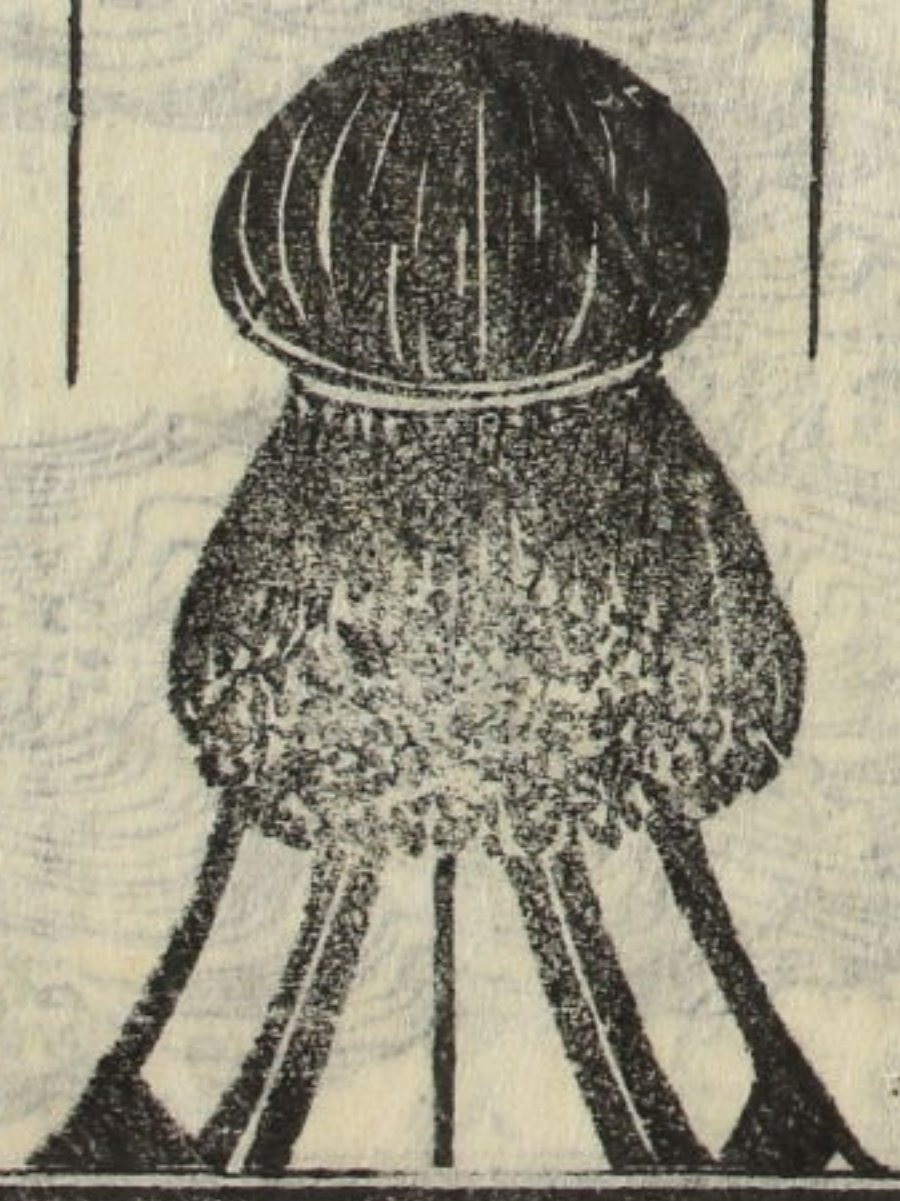
八木家規之傳圖

八木家圓丈と結ぶ詠

八木家圓身と省く八木と法む圖

八木家圓身と法む圖

土屋角記魂食ふ赴く詠



大正十年八月廿九
本大學出版部
贈

繪本金毘羅神靈記卷七目錄

坊を東行とすじ圖

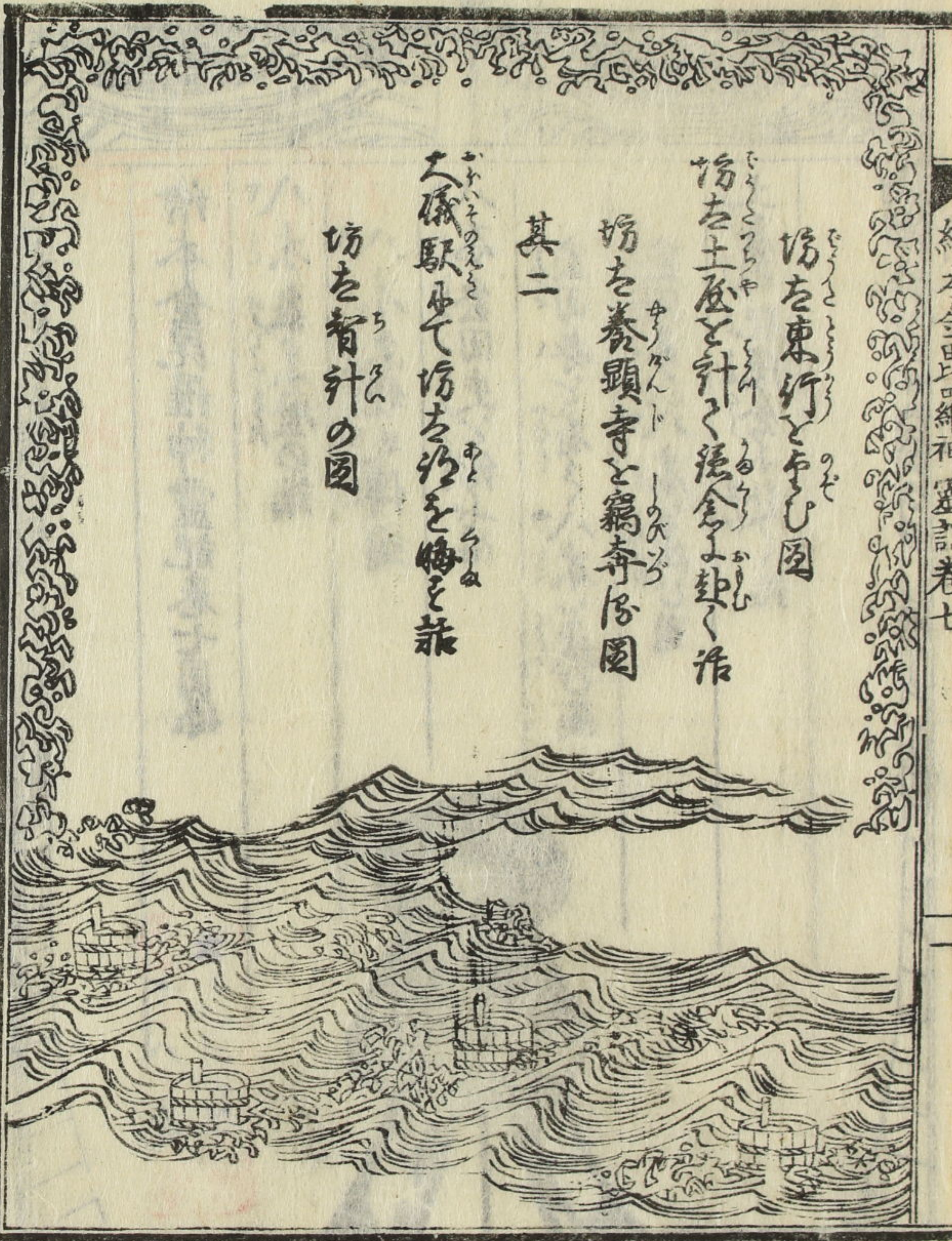
坊を土屋と計り法念より起り活

坊を養頭寺と竊奪は圖

其二

大儀殿中て坊をゆを悔と詠

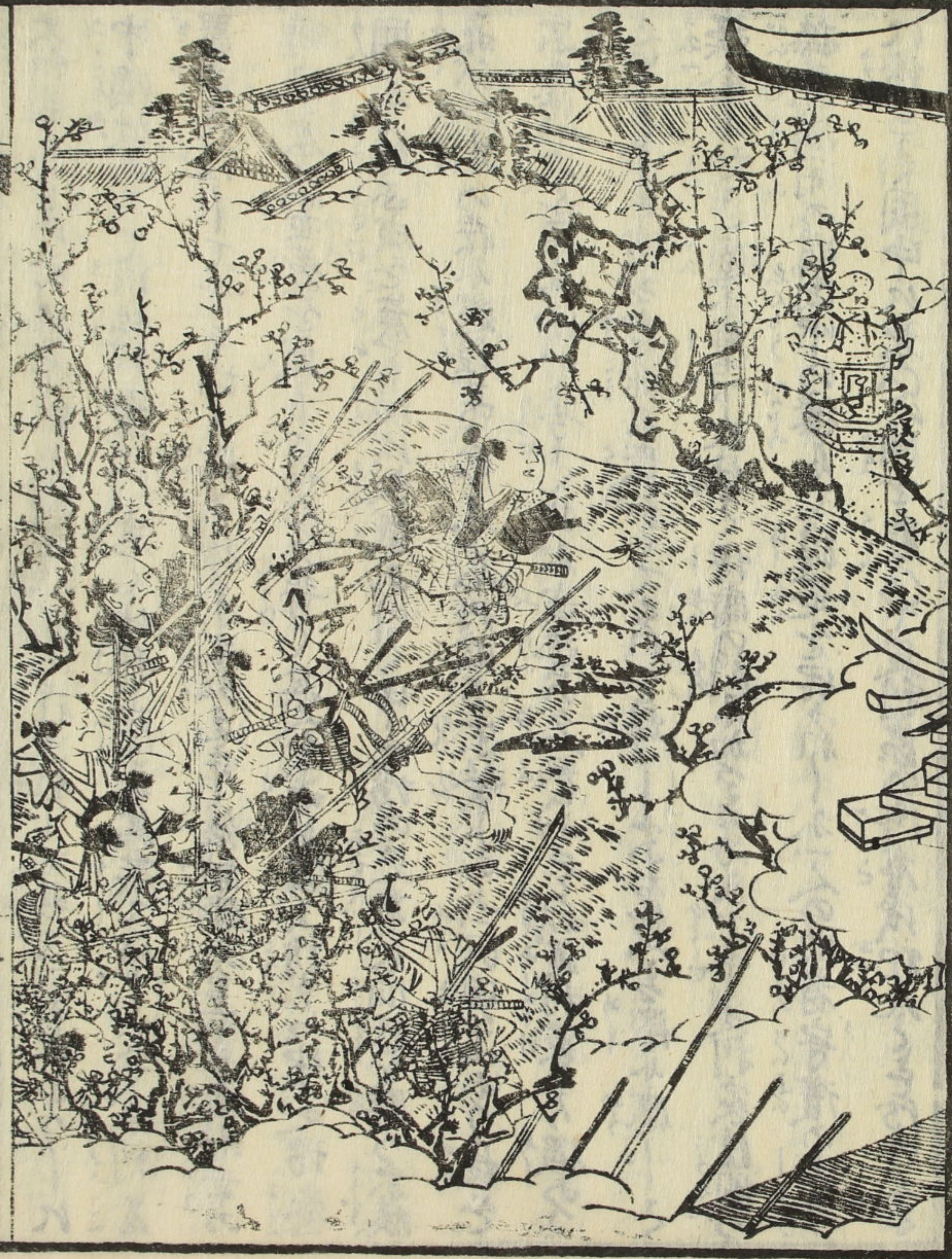
坊を智計の圖



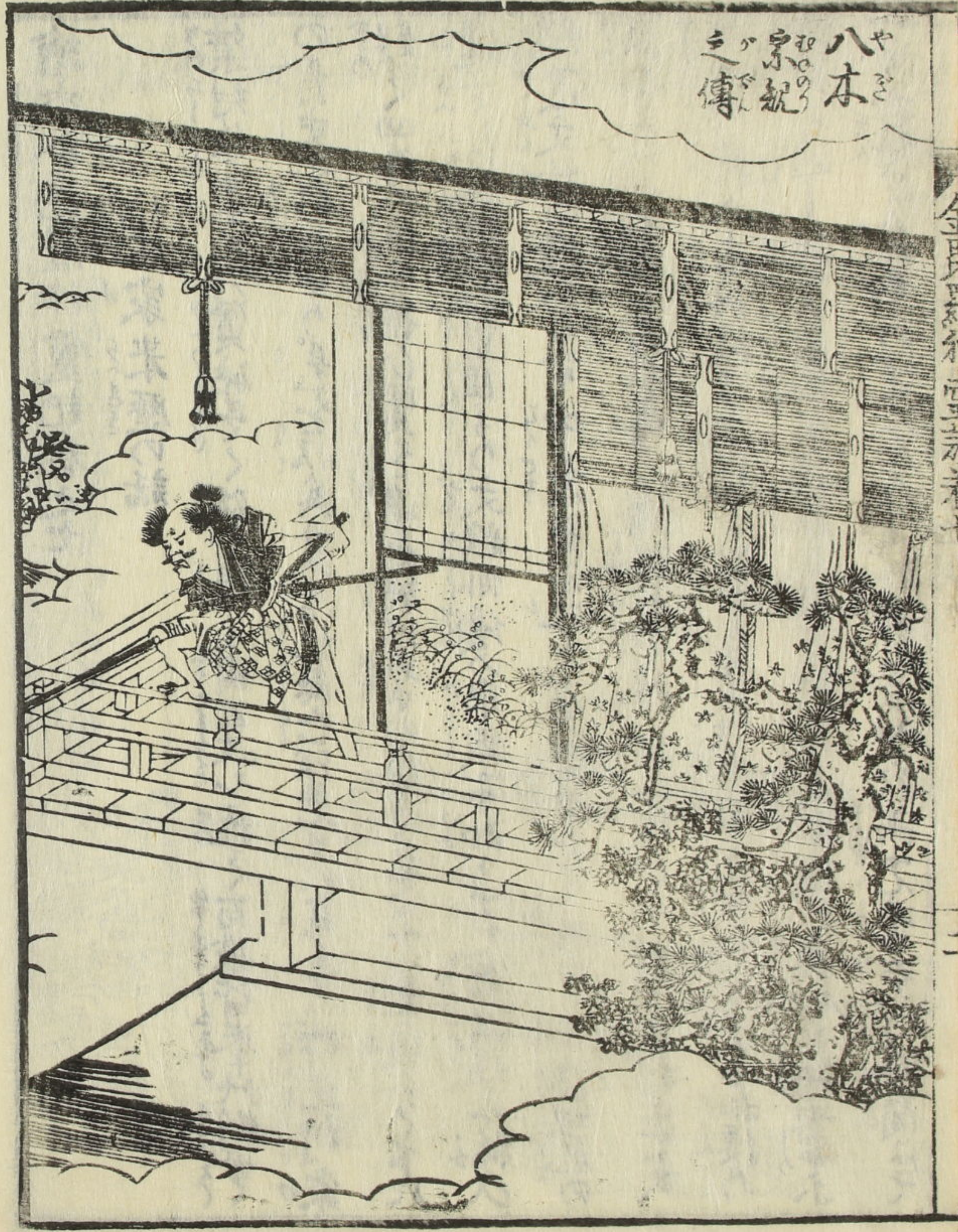
繪本金毘羅神靈記卷之七

八木家来歴の話

桀紂位もあまの賢能よく跡を隠し周公政を執り百儀皆備奉此刑也
 の青史小経然るも是を以て其世の治乱無亡は身するに足る作是利家
 起り四海の礼を擧げ賢を遣はれ終に孝子のひしきを上り奉位かく下り
 遠方行く執政の重臣より文雅俳優の卑賤なるまで各其仕事秘に
 制度文物の盛ある幸中葉是れ比とる所の事なり就中干戈擧げ礼の
 後かまへ勇武も名を得し諸將等て好むるに違ふし斯小足利家武
 徳の所範八木丹波吉宗規としてふかと資性忠直豪傑にして文を和漢乃
 諸典に通下武を古今の諸流もあつて中もと新陰の奥秘と極め事不
 一世不冠る名譽の達人あり其の身をあつて其生を菅原の路商して



全長四尺五寸 幅二尺五寸 重二斤



八木
の
宗
之
傳

全長四尺五寸 幅二尺五寸 重二斤

大和國春日の神職を勅免同玉八本の莊次郎にして若き家系ありしに
中頃放あつて旧領放棄一門悉く他邦小隠其庶子傳ふて誠別置
置寺に任して中之坊と稱ぐ猶も小元弘元年後醍醐天皇は置階幸の
時南本の靈蓋を感トさるひ普く其人を求光の人物ら中之坊を
聞して楠正成を薦し功次威威ありし中之坊の兄某本用を賜ふ宗族
五匹八本の庄本遺後其子と八本丹波守宗繁とら二の男子あり長を
宗繁の次を干兵衛と号す共小武藝の名譽ありて足利家より徵あり
とてとも十き流官途小意かくてこれを釋し宗を傳ふる徵小應トく
深倉小越とて逐小麾下に仕る侍衛の列丹加と名ふる一年足利家後園の
梅花満開の附園中の樓にて遊遊を罷りけり一人の曲者守護の士車
に給ましく園中に遊び入間を窺ひて足利家の侍成犯人とて斥のき

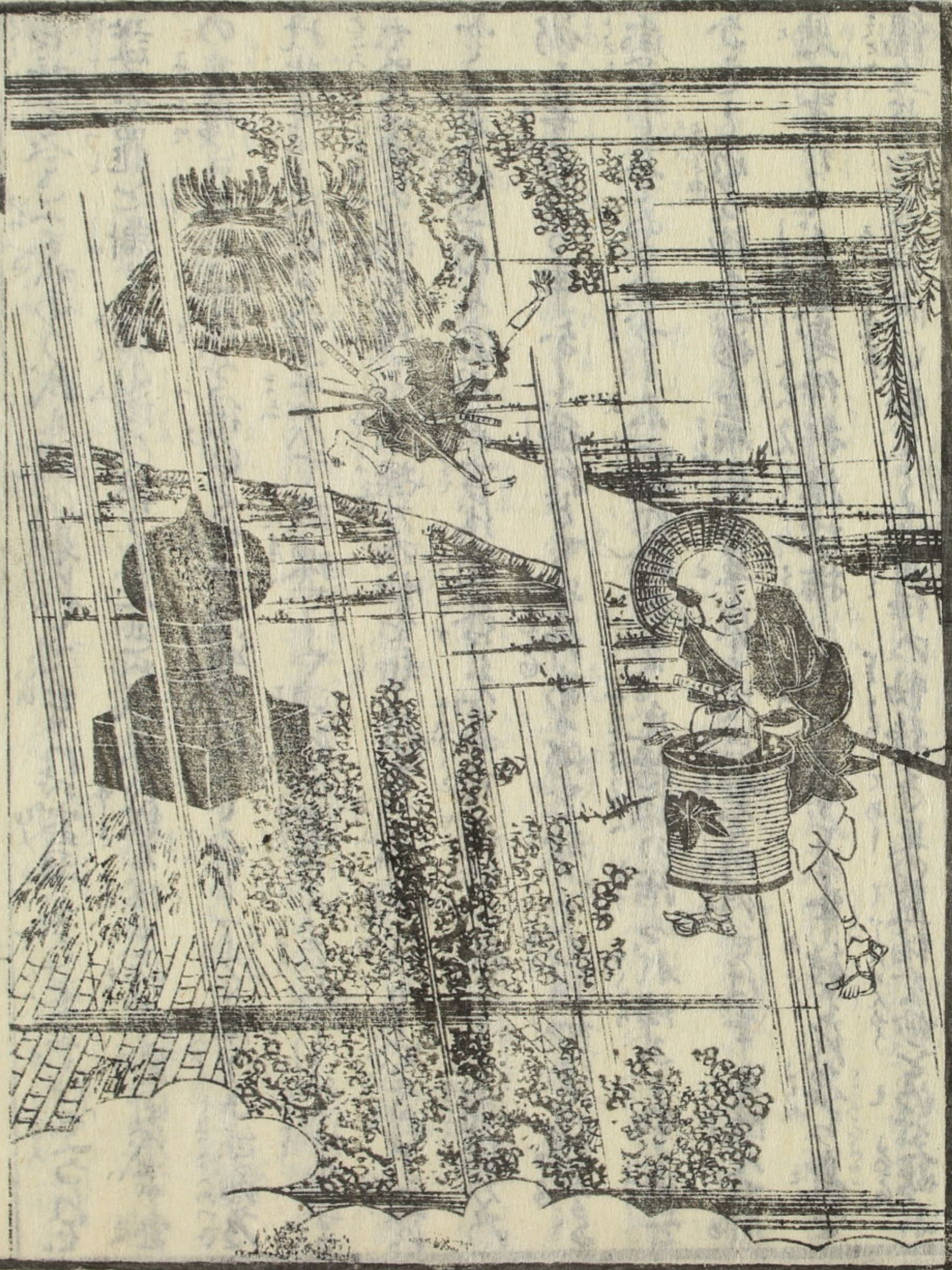
色あり侍衛の上此倅然見るとをちの小驚と我村人として發せり一子曲
その叶ドとも思ひ多む忽ち梯を飛とる乃ハ本宗を傳り園中の道遠
て遙かけ形勢と見るとも真一文字小馳來を既小間道くなく久波曲
者之音を上。家々小桑相摸守高時譜伏の臣神田十を傳つとて大別の
勇士たり。輒政の跡小働と亡君の仇を報んと計りに天運拙くして其志
を空に去來死物狂小屋の衣染人我勇猛の働を見と後代の例小
せよや云伝小式尺八寸の太刀とま向かうとて。八本を目めて切くぬる狀
恰も猛虎の荒とるかかきまは並居る諸士八本が愛あらんやと聲をこき
て指さるげ時八本とちやも發らんかと申腹身構く電光の如く也と見ん
とまの案に遠り神田魚かく打せむは忽ち傳流し一姓一奉秘濟を
盡して打合し小八本遠を傾ひ踏せし身下り神田も月しく踏ぬて

打たれぬや八木と討まぬと見え小左らなりて後の方二回許され退け
神田續くよけし見へし河七圍ん其體忽ち二つやあつてせ倒さるる是
母族く諸士八木の術の精妙鬼神不測ある小伏して其右小左の難と知る
是と始りて殺回勇武の功績ありし久遠小田原小教書の来地を加
増され八木丹波も小親し名を高く二代將軍義詮に及び清越義満公
の降籠り威光肩をさぶるといふふらね

八木室田文を結ぶ話

斯て八木丹波も小親武藝の精妙なるのみならず是利家の降籠り
久名譽日々小盛なる斯小足利家の麾下に屬し許きの戦場を経て
剛勇の名を馳せし室田河内守仲政との小隊將あり八木も武藝世
に妙なるのせしとの風流を聞て安らね幸に思ひに度優考と感ん

思や其頃と已小天下治平に人々干戈を用ゆるの附あり終に流と一計と
案し如く密少人をし八木も他出の折を伺せらる小一後丹波も加巳の友
夜作おのぞく侍手復取只二人を従へ潜りてゆ以室田の家来伺知て
仲政小斯と告り久仲政も小ほひ驚く初らる處かまは奴隸の如
に如きその二腰を平座浦をゆく八木が降路お侍みえり八木は初れ
知らぬ室田が子も亦も思ひを室田はさうも模合り初れ切せし
八木もいふに抜合は室田も二世の力とゆい誓い子と接し聞いしが
八木が初らぬ働は小合も兼流小刀と打たるるを遠く逃んせし八
木声をうけ海路に逃れし不意の罪籍小なるをいひて切おせし不
頼の徒あるぞお放しと人の思を除んと思へる下即小掃ふる屋敷の
手持見ゆあま討殺せんと思ひしは其志を革くす世のいひと止ん



今高田の申すに...

五

武と八都身家
と本が都身家
むらど



金馬路の...

五

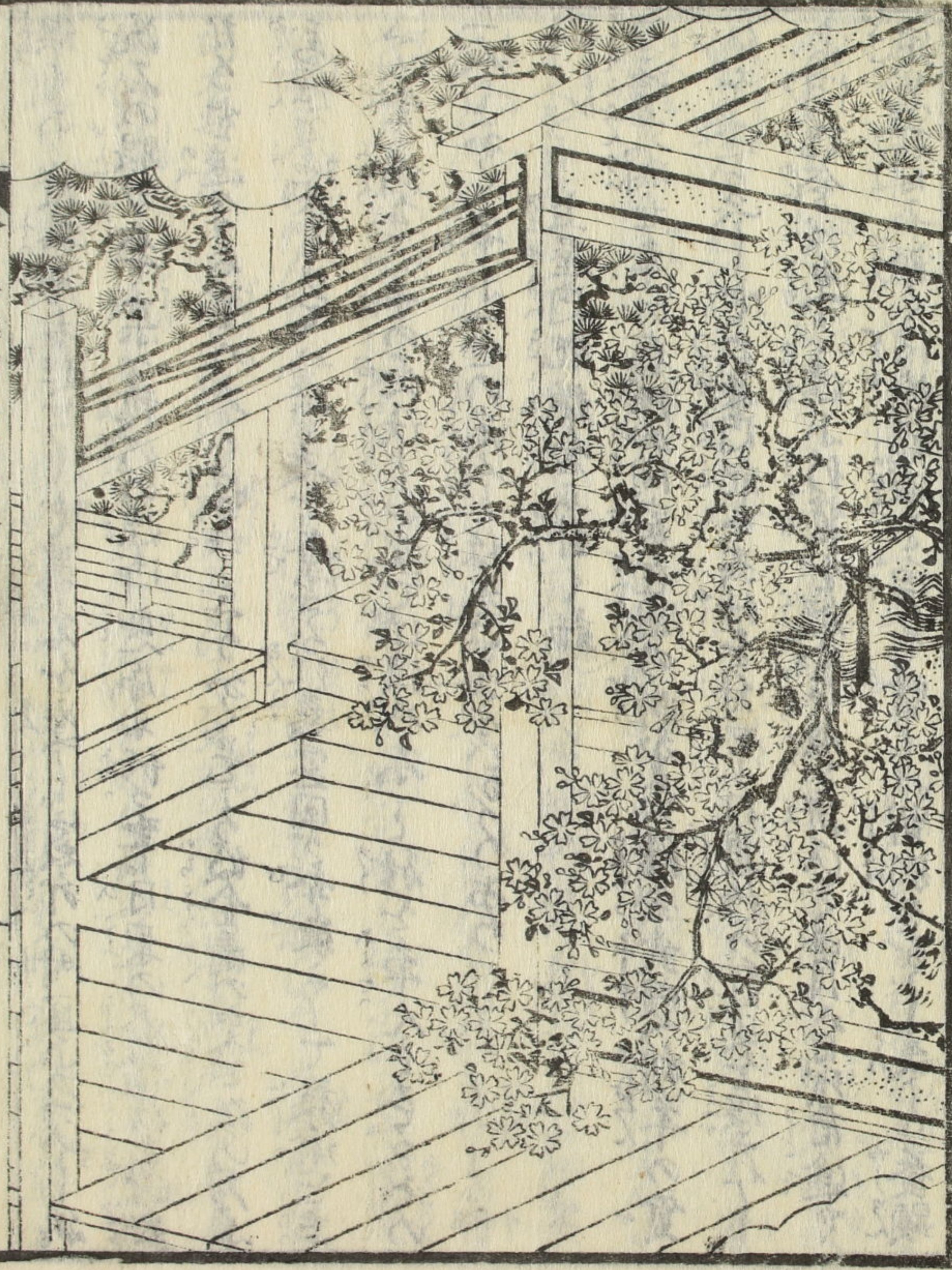
曰技と云く一義あり我れ從い亦長しと云れ六宝田と云く亦亦むじたる也。
 謀と罪と謝し跡小ほひりく見よ六八本の教も歸りてはく宝田は亦宝
 の度降る格に威儀を信ひく云く只途中にてと云く一とく汝が子海なる
 此比本の何ぞのふまびて飛速せしと述は不責なり。去るく汝が世をす
 又只操力の術を得く未操力の心を知らず是一夫の未技なりてそのむふは
 云く又終る所も宝田其言は聞外は某市井の無頼なりて圓操力
 術をまびく事か。汝れども今作ある術を知りてむは初むは用か
 處かしやあつたがう不責に存りり。凡操術の法は形伴ふよる用を
 かせし形。汝も術を用ふは足らばして心身を修めばは半は除んで同
 見る幸りくも是身伴拈捨拈捨して一も應むる半能くは忍ら身を
 傷らばく。又心の修りかくも身伴の執持手足の盈縮玄妙と云く亦亦小

遇ても畏るまなく身を全くする不足なり。されば其術小技妙を得んこき
 劍法の要はていつんやと様をまうく難くは八本頭と揮汝が詞一理も
 其あふびとせし某が心法得るといふ。其術と兼く只管ふおるはく不
 何ふは身伴其術小技して汝を論むるなり。其放をゆらぐ六甲之百散
 各其用を物も其まうるをさるふ心あり。心其處を失らば百變亦も感むと
 ども是れ應と所幸一毫も失らば心着して屏か處あり四支百散を用と備
 是とも意むるをば其中と失と所謂を焉も在らば視とも具は聴とも聞
 ど食とも其味を知らふの理も畢竟機關本偶の働く小者しく機擘全
 の力も毛の細か存るはく何ぞ用かをさるん已れりて汝が術と某は方は
 とくとも一途も其法は與人と思ふ心抱きて機を見る幸ぬらうかど
 緊要の多は身は快し甲氣を取る。是をぬく思惟なり。只は道のも極小

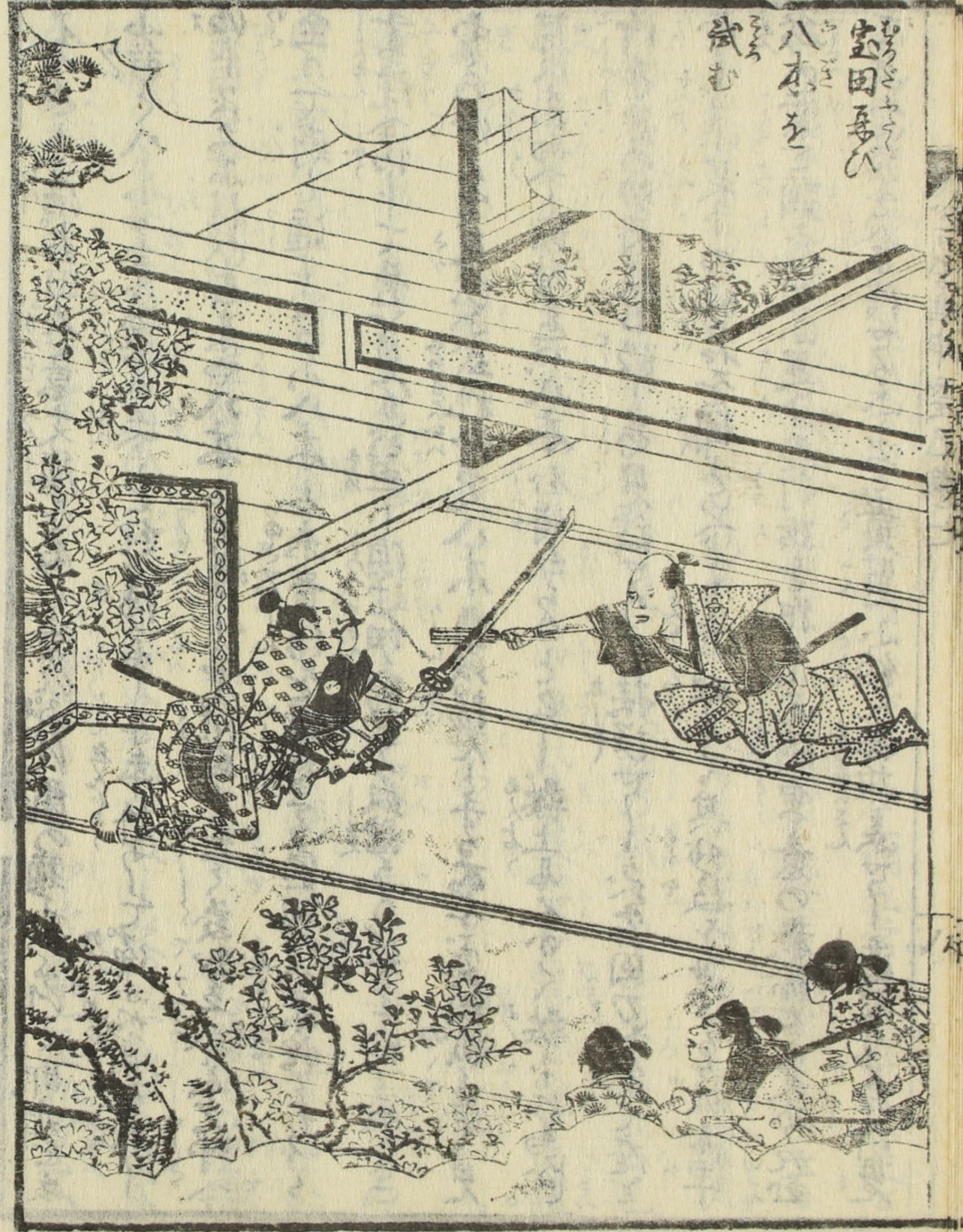
あつて身を脩め家法亦ふも是れ也。其要は二綱五常に在りて是と
 仍の法を禮儀我三百威儀三千これを以て遠くをみ。後にも只三百
 三千は禮を以て得ても其心を以てれば虚文ありて是なり。後にも只三百
 の酒色小溺して返不忠孝仁義を況が下ん。一時の試みありて是なる也
 故も後賢大學も虚靈不昧を示し。中庸に未發の中と説く。三千の禮
 義の由り出る所斯くあると教ふるも幸に異ありしは之も理に一致なり。
 汝已其病を得たり。は後深く此理を究め劔を弄する小者と用ふるの
 財小至る再び亦のて我も告よや恐小なり。酒飯を以て持て帰しけり。
 室田と案に相送り茫然として邸小還り。八木が示し身心體用の理頓
 非悟でて。無念の幸も思ひて行住坐卧思ひを凝りし所が一夜書齋も
 今も表更かたて書と讀くありし何處よりとも如く片前一足机のてく

ちりごとと落室田不意文復を返り學に如く氣の頭もあつて即死せ
 小終り八木が言成悟り夫を以て轉り幸半幸許ありて遂に妙用を修
 けり。又小終り去來や八木小若るしや所身う受く發出之八木が邸へ
 至りて則ち通下るる八木も未音信を通せざる室田の入來悟をたが
 書院に下りて是と見互に道へ順切小出たる奴隷なり。故も何れもここ
 ありの併せて互に小武礼終り。八木首必揚んとする所を室田抜きも見
 せられたり切付は六八木を得むらりと名し。鞍上人なく鞍下は馬か
 清も其の功丹波ありとお見せせりと扶投りしは室田刀を納りて座を
 下りし是れ下の信を聞といふも自説く其妙技を見せり。後にも早
 秀の正業と顔で廣小室下の行路を犯し。不圖原意の教諭を受令に必
 て其旨論を令得せり。小室を貴賢小徳人を推素りて處たり。若し見

武田八木を



武田八木を
八木を
武田



隈もわし其層を起せし思意を交し。之がの耐厚小なる一。流石の眼刀也。其が執柄の流石見居る事。日本のお徳は志の空たりせ速くも世の八木も悦びたり。是より故金蘭の文を流し。高徳を絶たり。八木を棄るに意。空因が棄れり。て教諭と。う。年。而さる世の受法。も来て。は後八木と。能を率人と。その一人もかく。事小一世の名人と。称せせり。ありありあり。

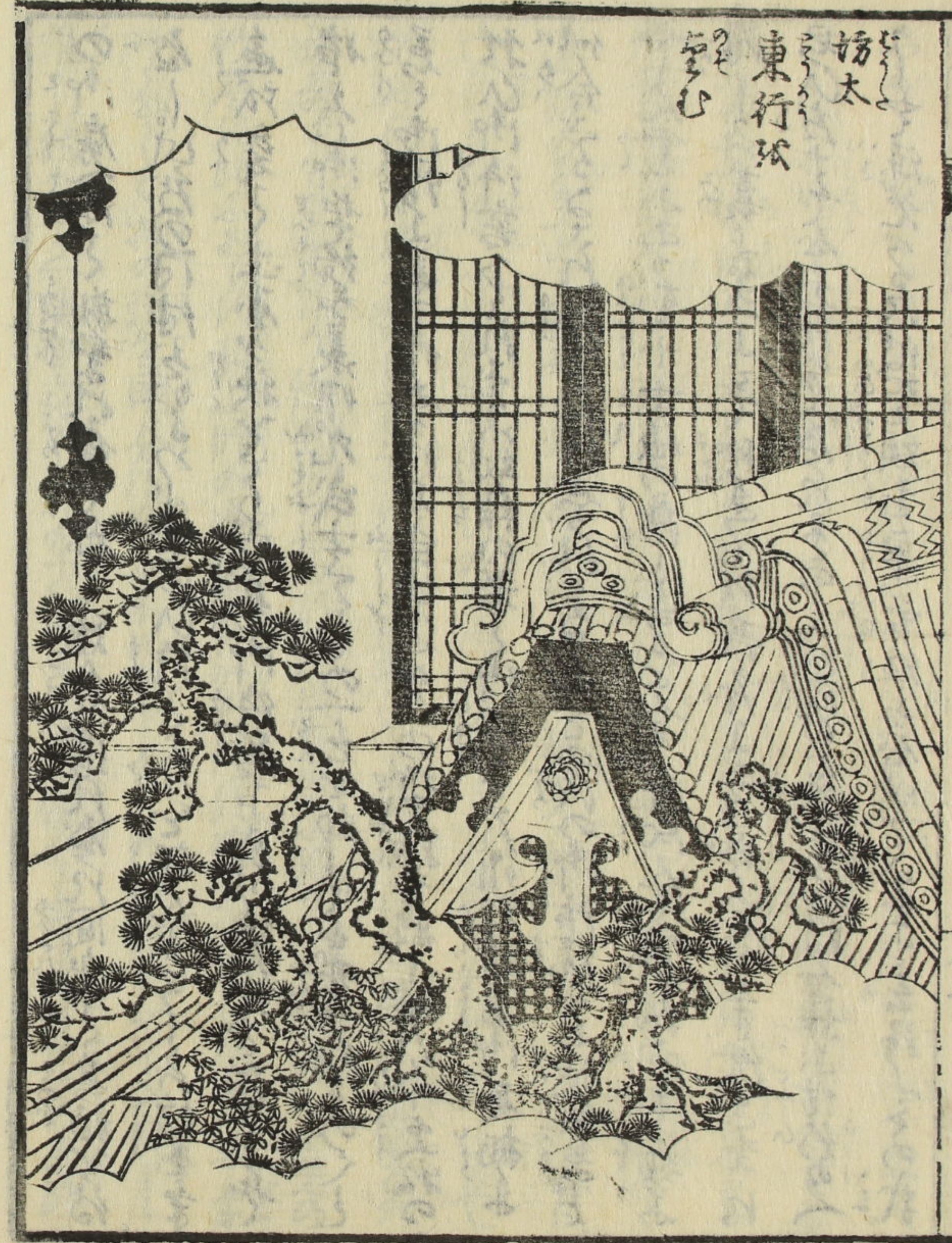
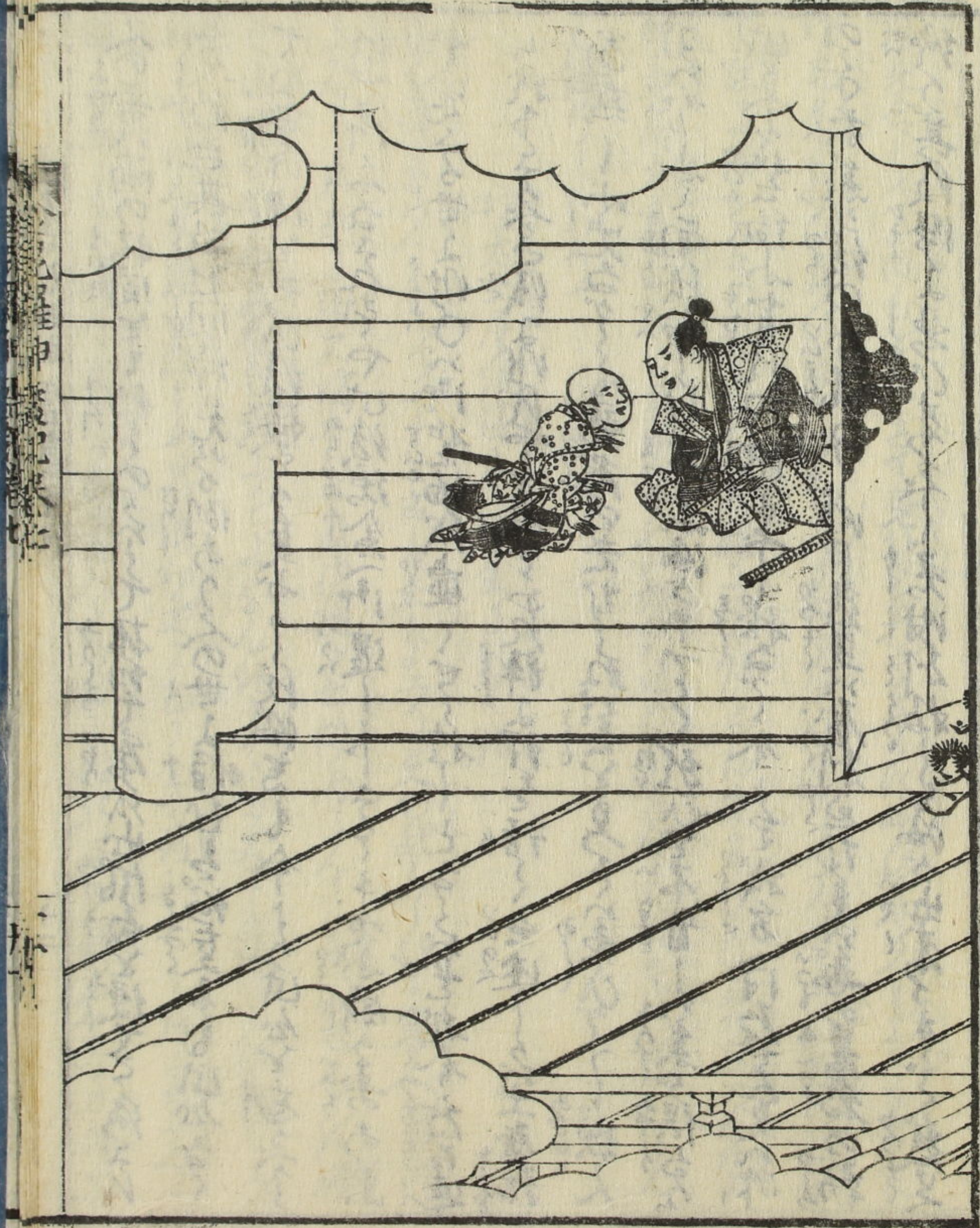
主屋内記 鎌倉小針く話

于時文明七年の春。倭加同家在園の折。おま。鎌倉武將。新年の賀儀を述らる。也。去。内記。中其任を付せられ。東行の。後。是を。久。内記。念。成。ま。速。小。針。装。を。調。吉。辰。と。折。ひ。く。四。月。八。日。以。前。途。定。免。赤。日。少。等。く。同。僚。親。戚。を。受。り。て。誓。し。け。留。別。を。ま。し。ま。し。り。養。願。

寺。亦。了。て。先。考。の。墳。墓。城。お。し。方。丈。八。入。く。東。行。の。法。身。と。告。り。公。志。し。き。附。着。る。事。六。世。の。御。人。と。し。け。不。田。文。坊。を。も。希。て。よ。と。鎌。倉。小。針。八。木。衣。に。之。穿。人。と。公。証。系。附。ある。親。も。思。く。内。記。が。鎌。倉。後。良。を。烟。入。す。り。優。曇。華。の。花。侍。ゆ。る。心。地。し。て。け。洲。高。城。を。ま。と。せ。去。國。の。側。小。侍。後。良。小。を。人。を。見。て。内。記。が。側。小。侍。を。寄。げ。及。鎌。倉。小。針。城。を。取。り。事。小。し。て。了。事。は。る。ん。清。若。芳。が。あ。り。中。堂。を。て。清。若。と。る。べ。し。也。之。な。れ。ば。内。記。も。此。時。言。ふ。事。中。院。愛。の。坊。を。頼。ひ。何。事。奉。人。と。其。を。會。し。結。ぶ。は。る。と。去。実。の。希。り。切。信。ひ。中。堂。も。あ。り。僕。徒。を。退。け。て。何。事。の。頼。ひ。と。し。尊。れ。る。事。坊。を。お。か。し。く。兩。子。孤。は。久。松。身。小。の。く。天。切。の。お。ひ。ひ。を。何。事。も。あ。り。頼。ひ。の。不。清。軍。許。り。と。る。事。の。清。若。を。物。を。取。り。其。上。也。て。や。よ。し。と。云。は。内。記。も。不。書。其。思。く。復。ぬ。る。事。は。流。石。切。維。の。も。れ。お。ひ。更。な。さ。り。

あてても有向、中其立、候て服指の纏を、つくりけ。小柄を返す
了、申、打物。其方、初め、て未知り。是を、合、打と、名、付て、武、士、さ
その、骨、の、折、約、不、用、な、可、有。斯、く、し、た、心、重、く、損、の、事、立、圖、と、し。
何、更、も、あ、進、許、ゆ、た、申、し、せ、と、れ、を、坊、を、更、ふ、事、を、な、め、た、想、ひ、し、
了、の、心、も、あ、い、ひ、垂、る、念、願、の、子、細、あ、り、て、鎌、倉、兵、部、が、尺、や、去、回、け、な
許、數、目、を、幸、小、清、信、仕、付、の、坊、不、清、潔、ト、し、た、事、も、石、連、ら、れ、り、長、
せ、思、ひ、へ、て、述、れ、れ、内、記、案、に、相、違、の、事、い、あ、り、と、尋、ね、て、眉、を、顰、め、る、
候、事、さ、ら、な、半、た、り、。鎌、倉、と、い、ふ、約、程、武、百、里、不、得、ろ、し、折、ら、れ、た、小、里、の
り、藤、原、朝、宗、あ、り、其、上、所、の、許、房、不、許、も、傳、信、傳、信、も、地、也、と、い、へ、る、事、未
神、か、く、物、の、理、を、圖、分、け、申、す、事、不、似、合、申、さ、り、り、は、我、ら、お、の、り、耕、
誰、。後、さ、ら、と、端、折、約、。詞、空、く、さ、さ、申、し、海、今、わ、し、生、長、也、と、い、ふ、事、
の、御、房、傳、く、勅、巻、に、高、々、稱、し、鎌、倉、遣、戻、ら、れ、回、樂、く、其、勢、と、侍
せ、し、げ、後、の、侍、付、の、か、り、下、さ、し、ひ、控、へ、て、起、ん、と、せ、し、く、坊、を、ま
通、証、受、り、土、屋、が、狹、と、り、宿、易、御、許、寄、下、さ、ら、れ、候、と、な、て、り、せ、
始、と、し、清、誓、約、を、兼、作、丸、武、士、と、い、ふ、事、の、一、と、申、す、事、を、變、ぜ、ぬ、と、い、ふ、事、
若、く、清、誓、約、と、兼、て、作、し、た、り、武、士、通、使、の、誓、約、を、形、す、れ、今、更、私、の
形、ひ、御、許、寄、下、さ、ら、れ、る、幼、稚、の、老、と、神、漫、さ、ら、れ、候、状、道、道、御、身、柄、も
似、合、さ、ら、な、れ、候、と、な、候、事、は、ま、り、に、此、の、派、の、御、作、候、を、徒、然、草、と
や、し、ん、書、小、あ、る、を、十、寸、棧、の、為、と、り、と、人、小、身、向、ん、と、り、物、雨、氣、の、類、も
際、へ、六、畳、と、い、ふ、事、よ、う、と、て、終、ま、り、候、事、も、あり、合、ふ、と、申、候、事、に
思、ひ、あ、り、た、公、志、だ、ら、な、れ、り、あ、り、雨、の、森、と、い、ふ、後、を、辨、ふ、傍、り、の、人
く、せ、殊、先、に、彼、重、頭、を、早、番、位、に、公、ゆ、な、と、申、す、事、も、云、許、さ、り、候、事、の、哉、

の御房傳く勅巻に高々稱し鎌倉遣戻られ回樂く其勢と侍
せしげ後の侍付のかり下さしひ控へて起んとせしく坊をま
通証受り土屋が狹とり宿易御許寄下され候となてりせ
始とし清誓約を兼作丸武士といふ事のいと申す事を變ぜぬといふ事
若く清誓約と兼て作したり武士通使の誓約を形すれ今更私の
形ひ御許寄下される幼稚の老と神漫さられ候状道道御身柄も
似合さならなれ候とな候事はまりに此の派の御作候を徒然草と
やしん書小あるを十寸棧の爲ととりと人小身向んとり物雨氣の類も
際へ六畳といふ事ようとて終まら候事もあり合ふと申候事に
思ひありた公志だらなれりあり雨の森といふ後を辨ふ傍りの人
くせ殊先の彼重頭を早番位に公ゆなと申す事も云許さりの哉



坊太
東行
心

金田氏神代卷七



人の善い雨の時間ともゆゑのふくそて括切て度分出風ぬと使てて病ざん
 宜ゆき其故と同傳先なる例あり。人の世よほむむ。何事もいかに
 ていふ言の續と共い後悔さるる更おろくは。海も今よりいかにと忘るる
 けし。清なるまをむや。け後悔念(清遣)トするもせよ。願ふ事ある
 せ定るる世に惟ひハ神聖物成虚くせ。然しとす。是れ今た百連
 ら。然しとす。成し惟ひやせおどおれ。群を信く云連しく。土屋死
 高然し。小児なるが。も。為者の老なり。ぬ。云とあり。其いご。歌ん
 ま。如しや。面成初らげ。喜ふ。海がやて。歌ひと不昔し。其まが。信るら。
 け。人々。秘物小。貴は。同傳。下。然る。今。を。我。方。何。乃。て。ん。更。の。際。
 の。子。系。系。が。後。の。を。流。う。り。日。夜。是。の。原。別。道。は。其。毎。の。最。初。の。勅。
 終。る。其。及。際。よ。思。ひ。來。る。下。若。財。利。極。も。海。が。出。る。す。ま。ぐ。其。是。

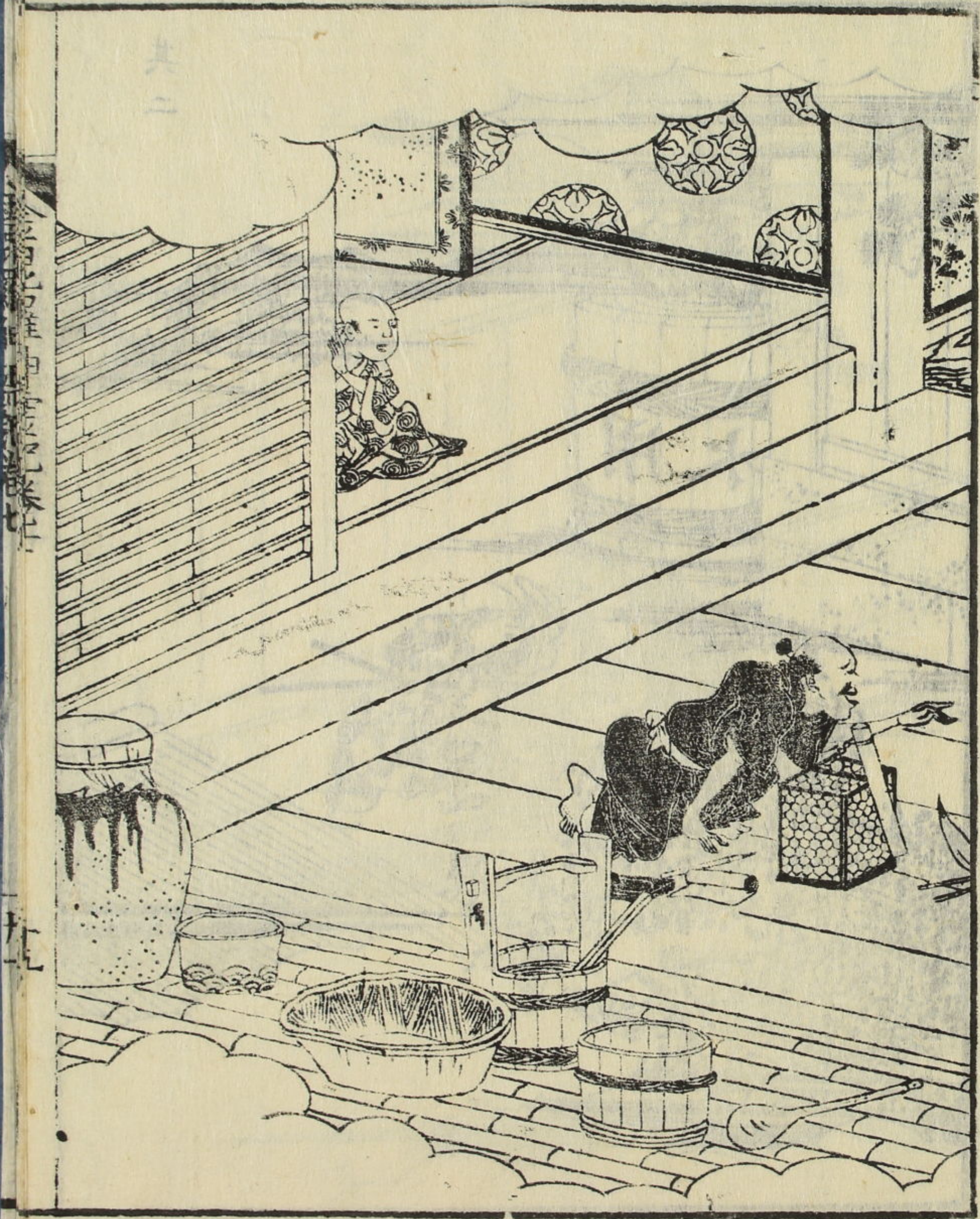
故見合とて。同公と。考て。見結ら。れ。る。中。の。斗。の。為。を。一。せ。之。は。世。
 坊。を。ら。小。孫。び。再。び。圓。く。河。を。け。之。の。内。元。住。居。し。り。や。考。も。詳。と。む。
 て。然。し。物。を。之。の。別。道。く。家。路。を。我。傳。也。信。元。系。内。元。が。夜。是。の。海。日。
 曉。七。の。九。毛。物。如。く。之。先。了。る。六。如。初。時。刻。を。信。る。坊。を。成。物。ゆ。ん
 と。傳。り。し。あり。

坊大土屋深澤く。深谷より赴く也

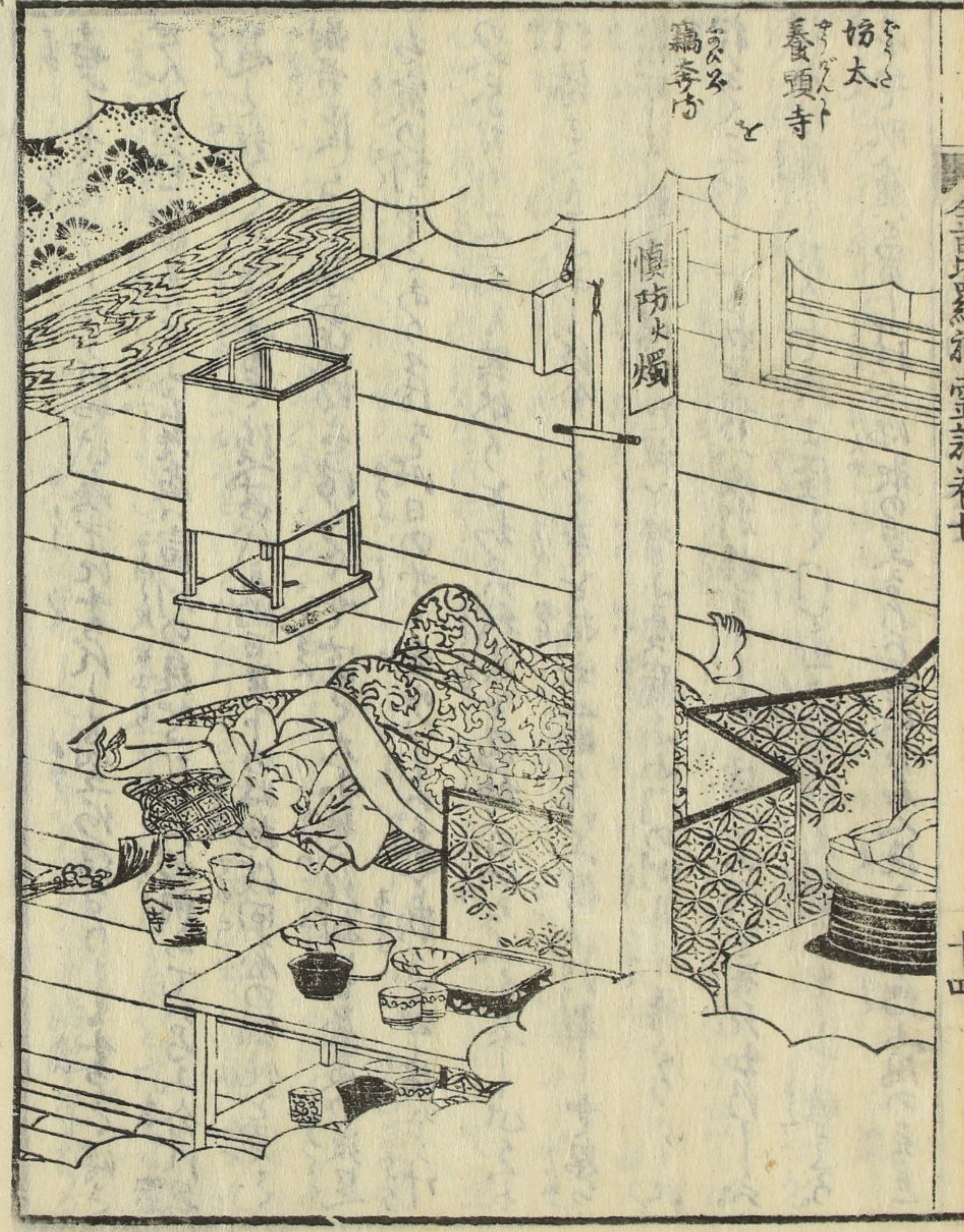
幸と傳るる。人。も。な。り。幸。と。成。と。天。也。を。う。天。の。然。り。ひ。る。番。人。力。を。此。
 ぶ。た。う。た。斯。く。因。之。坊。を。去。屋。内。能。が。去。傳。あり。ん。と。其。考。も。詳。と。む。
 を。成。礼。の。時。を。之。り。と。天。也。を。上。を。信。し。て。方。丈。よ。之。傳。る。何。れ。の。事。
 御。て。彼。合。の。用。を。け。し。め。其。後。和。文。よ。む。く。其。後。和。志。も。詳。と。む。ふ。入。て
 傳。り。し。り。ふ。坊。を。も。已。が。考。入。入。く。密。の。財。利。の。事。也。物。の。子。也。ふ

きしをりあわと取却て色紙あはる。又濡金一洗のそ何のくも屋本
 侍の濡金よ赴くより。お当并に権持村の扱方にて二庭の書意を
 伊勢國封下て容易人の服は無くも所所へ宛を分汁の縁支度も幼
 紺より身の色をひ思ひ申し進々哀あり。斯くして夜更成まつしは藤人
 やせしか候ひの候りぬをと侍のむ切るぬ。又ハ神靈の加護ふらぬと
 ぬれ成候ととき應給るるに也。神氣爽々眠る更候らば危有りと
 酒さる頃ふむく厨裏の方ふ人さるて一月と候し一やふびるの僕
 二助やりの元濡金に産るれば。七屋が君堂某ばば主人の然てぬ
 一書状書係をて思下も。三助え来無事なるれば。自ら用と達する度
 一書状書係をて思下も。三助え来無事なるれば。自ら用と達する度
 後とて海よりふ火工通人と様某くしては事と頼めば。海陸音打る

一書状書係をて思下も。三助え来無事なるれば。自ら用と達する度
 後とて海よりふ火工通人と様某くしては事と頼めば。海陸音打る
 一書状書係をて思下も。三助え来無事なるれば。自ら用と達する度
 後とて海よりふ火工通人と様某くしては事と頼めば。海陸音打る
 一書状書係をて思下も。三助え来無事なるれば。自ら用と達する度
 後とて海よりふ火工通人と様某くしては事と頼めば。海陸音打る
 一書状書係をて思下も。三助え来無事なるれば。自ら用と達する度
 後とて海よりふ火工通人と様某くしては事と頼めば。海陸音打る
 一書状書係をて思下も。三助え来無事なるれば。自ら用と達する度
 後とて海よりふ火工通人と様某くしては事と頼めば。海陸音打る
 一書状書係をて思下も。三助え来無事なるれば。自ら用と達する度
 後とて海よりふ火工通人と様某くしては事と頼めば。海陸音打る



九

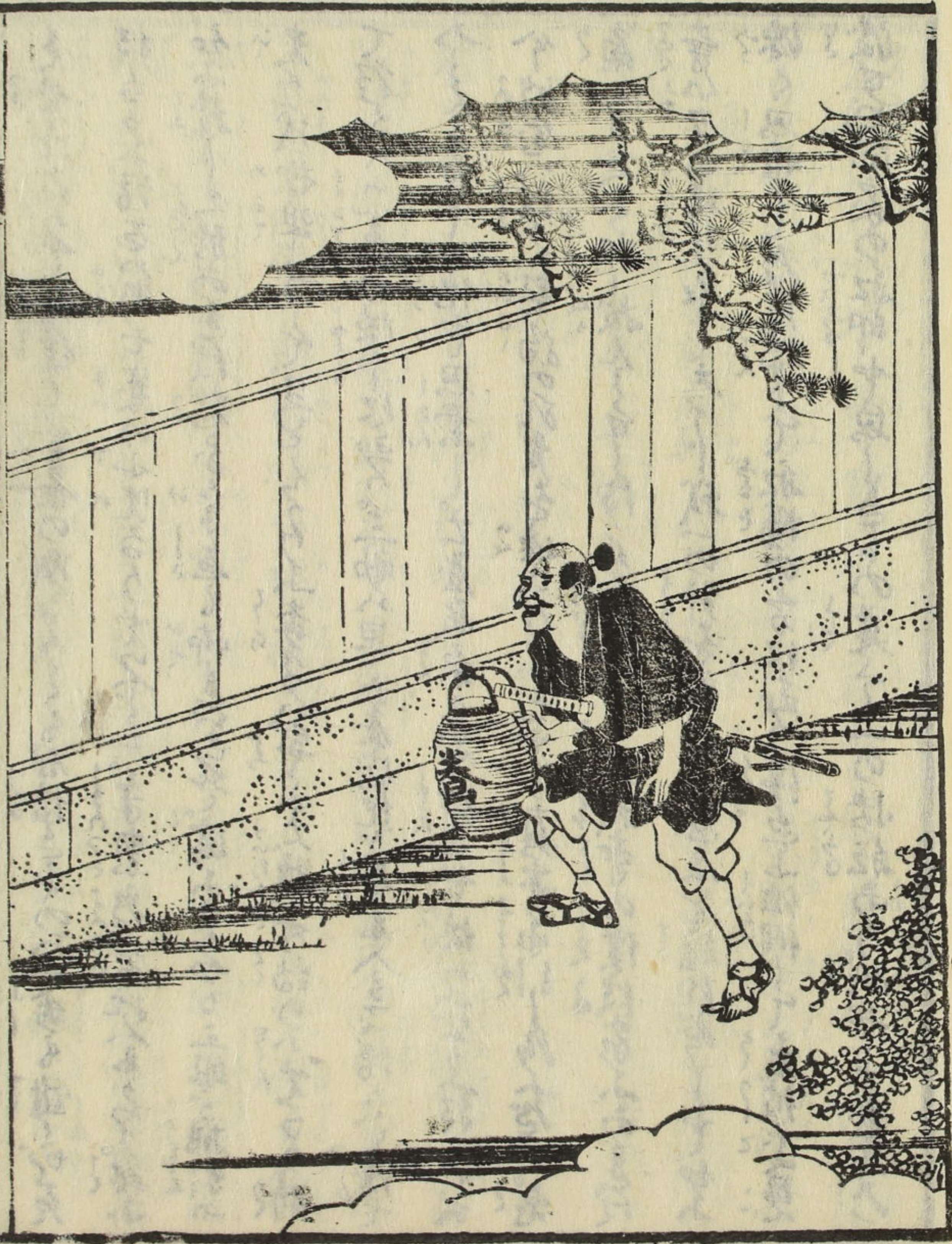


坊太
養頭寺
竊多

全言以新神...

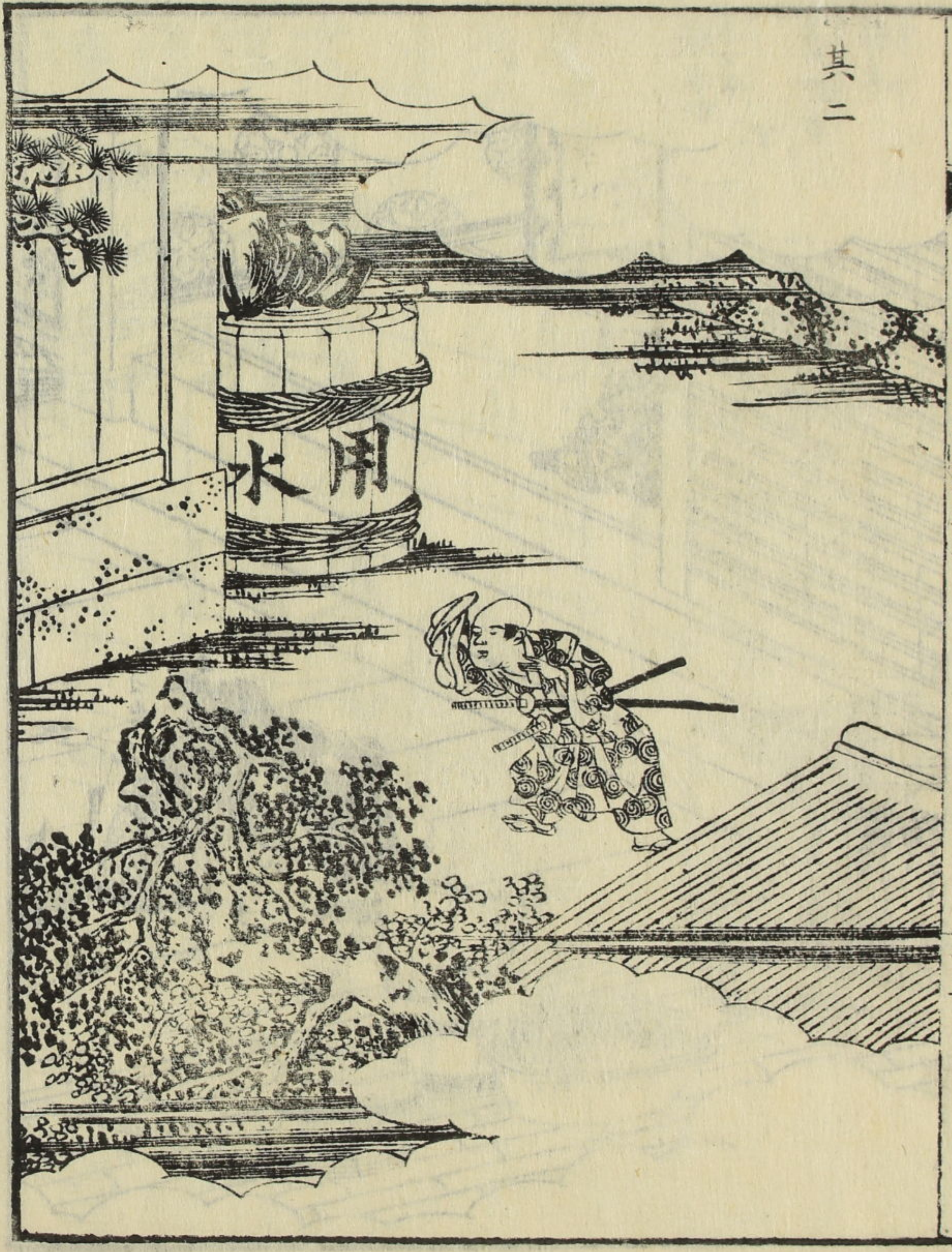
十

今更此作由中記卷下



九

其二



今更此作由中記卷下

十五

を言にらして物集く。生長の成るるも。を悟るるの。一歩も進みぬ。おれ
行るるふ。坊をの。七巻の。小児るり。せり。ま。寺。東。乃。希。此。も。ろ。う。お。小
知。小。花。し。之。成。あ。ま。は。斯。ふ。事。也。も。怖。ま。さ。き。也。遠。ふ。思。り。あ。り。三。献。が。挑。灯。の
光。り。成。標。準。と。り。て。是。と。ろ。ろ。り。ふ。奇。多。多。い。事。ふ。大。膽。奇。情。か。よ。せ。り。勤
て。行。あ。く。九。巻。の。陣。下。に。如。く。三。助。の。早。亡。在。内。記。が。第。五。八。入。ま。は。坊。を。も。備。て
へ。ん。と。り。て。吃。や。思。案。し。去。屋。後。原。家。と。傳。し。せ。傳。り。た。う。お。ろ。ろ。り
今。彼。宅。へ。往。く。契。約。の。紙。骨。を。連。り。と。と。や。う。真。事。中。引。り。ぬ。だ。ん。だ。ん
角。ら。し。と。り。て。お。け。ん。と。り。て。あ。く。ち。必。定。さ。う。且。我。寺。の。僕。使。家。ふ。あ。ま。り
奇。心。ま。の。坊。付。名。し。と。り。て。我。一。の。針。を。没。多。去。屋。後。と。鐘。に。だ。り。せ。お。ふ
深。く。思。惟。し。乃。成。物。下。て。お。場。の。方。に。如。く。遠。也。小。雛。個。し。て。去。彼。宅。を。見
渡。す。苗。家。の。お。印。や。思。と。り。て。建。つ。る。一。の。快。船。あり。此。ぞ。去。屋。後。入

系。取。る。は。じ。せ。道。く。あ。て。痕。ふ。よ。水。主。攝。取。を。は。く。熟。睡。居。り。坊。者。は。深
く。お。腹。び。お。て。お。ふ。系。極。に。換。へ。り。事。成。ん。其。九。巻。家。中。去。屋。内。記。と。り
せ。し。小。舟。あり。坊。を。針。成就。し。ら。の。せ。獨。り。下。換。ま。ぬ。る。高。物。の。間。小。舟。と。潜。り
解。さ。う。り。て。お。取。庭。し。せ。は。長。ら。り
大。破。取。し。七。坊。を。め。と。操。を。傳
斯。く。其。後。も。海。滿。く。鷄。め。お。理。通。く。な。り。し。ら。は。去。屋。内。記。に。没。備。全。く。用。ひ
家。持。及。び。送。別。の。目。録。も。終。と。言。二。人。の。為。堂。其。所。お。僕。五。六。人。を。徒。へ。九。巻。城
と。及。ん。じ。没。備。の。お。よ。手。取。も。六。水。主。攝。取。を。と。り。て。小。雛。成。お。く。と。暖。る。れ。水
風。ぬ。系。下。頭。が。は。道。の。沖。へ。系。物。し。恐。も。は。の。ぐ。せ。め。の。後。生。六。種。事。業。頃。の。元
概。さ。う。と。後。を。信。と。り。て。大。小。舟。や。船。を。毎。日。お。打。合。む。武。屋。後。原。陸。洞。も。異
境。の。遠。近。に。似。く。恰。も。画。圖。の中。に。あり。と。り。て。去。屋。後。原。大。小。舟。入。り。お。ろ。ろ

挑く四方城より眺むと思ひに、好まば膚を胃かき、さうらひ後の思と
 あらめて、杯をめぐり、半粒のゆき、湯守一、身不備張し、快活と云ふ
 に、妙手、促す、不眠を催し、而も、頃日、旅装、小公、信、目、赤、赤、安眠、され、
 若、枕と、西、や、の、あ、後、も、さ、ら、熟、睡、あり、友、小、田、官、坊、を、今、曉、う、荷
 物の、回、小、身、と、志、の、ひ、息、と、を、せ、ん、て、去、屋、が、拳、勢、を、伺、ひ、み、り、に、た、ま、ま
 候、も、小、熟、睡、の、件、と、ん、ん、と、も、寐、く、朝、した、ふ、あ、る、れ、寤、ふ、去、屋、が、枕、を、
 打、れ、若、物、の、上、よ、遠、上、う、去、屋、が、頭、の、側、肩、と、下、た、れ、内、紀、物、を、小、替、
 き、忽、然、と、起、上、直、上、何、ぞ、料、人、田、文、坊、を、刺、小、侍、を、い、く、お、お、や、曾、換、不
 動、の内、紀、が、の、と、も、更、よ、及、現、の、境、以、て、は、危、然、と、て、言、成、も、若、ん
 お、對、ひ、ま、ま、坊、を、覚、ふ、と、知、ひ、伯、父、怪、し、ま、う、我、を、坊、を、よ、く、い、と、云
 々、い、去、屋、が、更、あ、中、と、容貌、言、語、勢、止、成、ら、う、よ、向、く、小、方、を、い、坊、を、
 持、

大小、僧、の、海、上、遠、小、僧、せ、ら、は、私、(お)荷、と、て、事、成、る、ぞ、を、回、が、坊、を、持、え
 以、を、も、お、お、不、審、也、む、先、ひ、松、依、の、契、約、の、所、別、と、遠、下、せ、今、物、奇、中、と、思
 出、く、途、次、表、ぐ、ま、お、一、人、の、旅、傍、何、件、と、あ、う、事、多、う、海、と、丸、龜、の、家、中、と、云
 内、紀、物、は、ひ、澤、金、(下)へ、ん、と、思、ふ、ま、あ、る、ん、だ、や、中、(お)火、お、お、財、舟、後、と
 一、や、う、伯、父、と、い、は、ん、を、逢、し、熱、の、う、や、な、事、状、を、告、述、し、去、屋、僧、眉
 と、聲、先、汝、が、何、を、い、ふ、と、竹、は、し、内、紀、と、己、よ、今、曉、丸、龜、と、お、お、せ、ら、を、
 ま、く、知、稚、ま、の、幼、手、を、思、ひ、ま、し、志、む、し、や、な、は、は、愛、中、を、い、う、付、べ、し。
 人の、憂、患、以、極、ふ、る、出家、の、業、あり、妙、小、僧、を、佛、子、の、身、入、り、多、く、見、持、つ、も、汝
 形、我、汝、を、助、け、く、去、屋、が、珍、を、退、く、な、ら、る、僧、問、服、と、言、し、ま、未、あ、り、汝
 教、の、ま、う、に、任、し、く、去、屋、僧、忽、ち、我、を、服、し、抱、き、度、風、め、ど、く、ま、お、て、頃、別
 して、い、ご、服、を、用、よ、そ、そ、地、上、小、室、中、思、ひ、不、同、も、い、ま、れ、あ、る、あ、り、い、

智坊
大

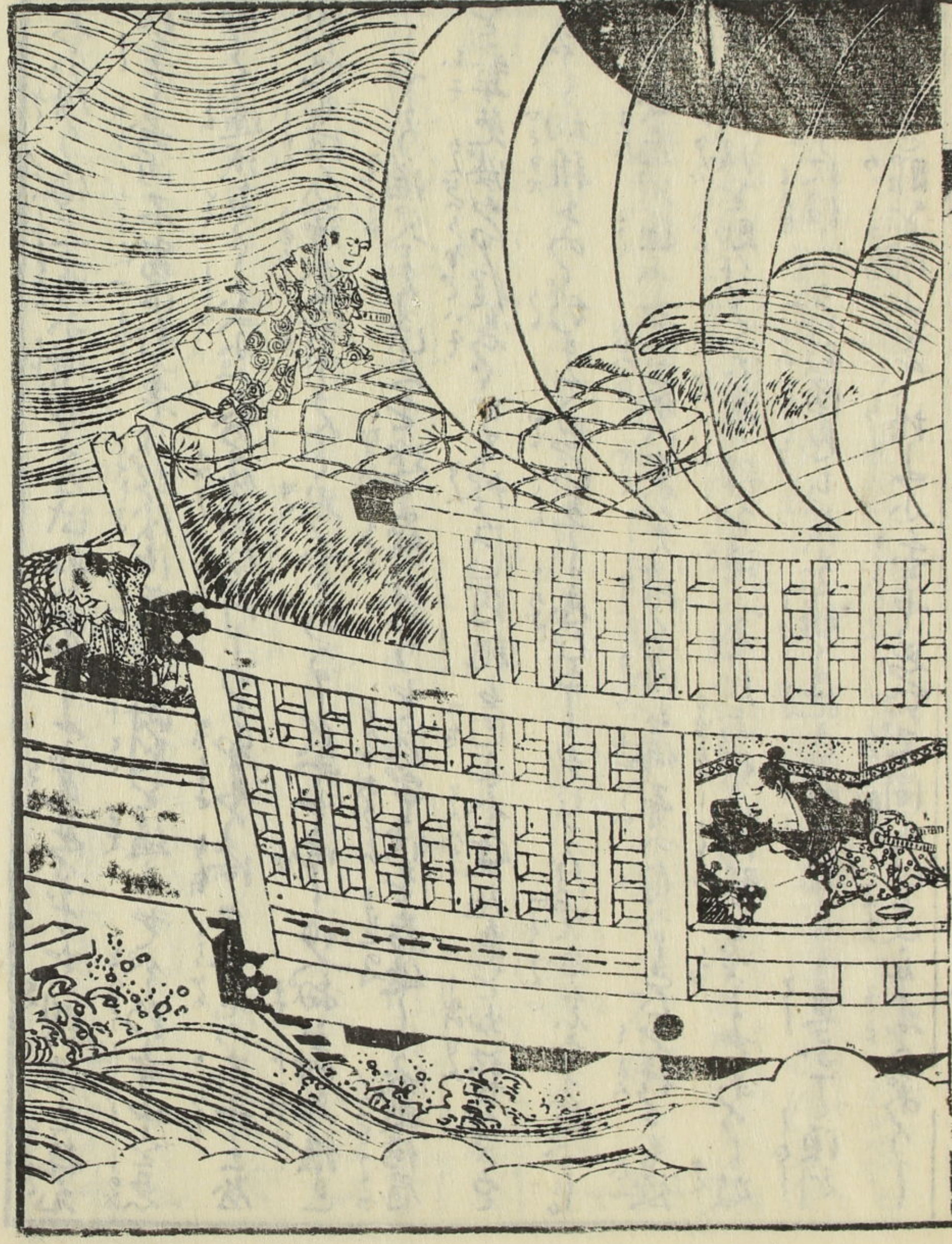


金田氏系年譜卷之七

廿一

金田氏系年譜卷之七

廿二



諸君の何地の何人形教もせく見共の心也... 訪を寓之とけは心も志だ... 進先席と云して云あるは... 上乗より大切の路に私小初紙... かく下人と云ふを... 城を圍ふ所一時の偶意ありと... 拙小今日の老系成りや... 生を仕より七歳の今に... 昨の法本字をわ... 尋常れ志形小わ... 助もすくは虚誕と戒め...

一見の大教と遠に... 此種を伴はば坊を... 計るるをとをわも... の才智ありとも... かく人や料も小... 思ひ斯く快... 終末迄の... 以余僕後... 道大極の... 念への...

各不異一城河也此は何と云ふこと内記書く南本と相列大依の
歌して即藤倉の西口なり是より藤倉二か橋まで路程二里半ほど
ふたれ藤倉と見えたりやいつ何南の用事と聞く又此方去城應橋
殿よりせよ久々なる坊を以兼て藤倉進み行はれ跡と曉して八本家へ至
寄りて思ふ所を云ふ大依の歌と云ふるその目を見し客店裏を透
出何處と究てなく東北方へ走り去るも初は設備も調ひ
うば出せんとて人殺と探しに坊を一人の方知せられた大依等
あて求むも其意指好所程月は乾く足は左右とも内附刺殺
おされぬ儀人を見し跡不疎して坊を捜す其身と藤倉の郎も合
用と勅免二月廿日申す藤倉と出立大依の歌より尋く坊を
に於て未だ此方打く藤倉此方の指すところなり次吉也

以後似あれ小見あつた倭加同家藤倉の郎へ送り居くはうりて意不
托並大依と敷是し三月十六日申す藤倉と出立大依の歌より尋く坊を
なる坊をの江戸末早竟如何なる次吉の書状聞くと云ふ

